

第13編 種豚の輸出入，養豚に関する海外技術 援助・協力と養豚学術の国際交流

第1章 種豚の輸入と輸出

1. 種豚の輸入

豚の外国品種が正式に輸入されたのは明治以後のことであるが正確な記録はない。明治2年（1869年）および同7年（1874年）にイギリスおよびアメリカからごく少数の種豚が輸入されたようであるが、それはバークシャー種とアメリカ産白豚であったらしい。また、札幌農学校（現北大農学部）で明治30年（1897年）にエセックス種，ポーランドチャイナ種，バークシャー種の3頭が輸入されたという。

1900年代に入って新設された七塚原種牛牧場（明治33年）へバークシャー種，大・中ヨークシャー種（雄8，雌14頭）がイギリスから，また月寒種牛牧場附属種きん種豚所（明治39年）へ中ヨークシャー種およびバークシャー種が輸入された。

明治32年（1899年）以降昭和11年（1936年）までに政府が輸入した種豚の頭数は合計270頭（雄76頭，雌194頭）で，その品種別内訳はバークシャー種が132頭（雄35頭，雌97頭），中ヨークシャー種が106頭（雄30頭，雌76頭），その他少数の大ヨークシャー種，小ヨークシャー種，デュロック・ジャージー種，ポーランドチャイナ種となっている（日本種豚登録協会，1963年資料による）。

以上のほか，県あるいは民間において大正初期以降イギリスまたはアメリカより輸入されたものも少ない。当時わが国の種畜輸入のほとんどを取扱った貿易商社（株）野沢組の記録（大田平八氏）によると，大正12年（1923年）から昭和13年（1938年）までに輸入された種豚数は合計137頭（雄64頭，雌48頭，記載なし25頭）となっている（それ以前の記録は関東大震災（大正12年）によって焼失している）。

このほか，子安農園が大正3年（1914年）～同12年（1923年）イギリスから輸入したヨークシャー種，バークシャー種豚の合計は50頭であるが，年度別，性別は詳かでない。

戦後わが国養豚の復興とともに，久しく途絶えていた種豚の血液更新のためイギリスからの種豚の輸入が強く要望されたが，連合軍司令部の許可が得られず，ようやくアメリカからの輸入が許可されたのは昭和25年（1950年）であった。しかし，輸入された品種は大ヨークシャー

種（1頭）とバークシャー種（6頭）のみであった。

よって，日本種豚登録協会を中心として，連合軍司令部に対し，イギリスからの種豚輸入を強く要請した結果，ようやく昭和26年（1951年）からイギリス種豚の輸入が実現した。

その後，イギリスからの中ヨークシャー種およびバークシャー種の輸入は昭和33年（1958年）頃まで続いたが，昭和35年（1960年）以降，ランドレース種をはじめとする大型種豚の輸入が急増し，輸入品種は従来の中型種から大型種へと大きく変化した（第2編第3章参照）。

昭和47年（1972年）以降近年までの生きた豚の品種別輸入動向は表2.5に示したとおりである。

2. 種豚の輸（移）出

わが国から海外へ種豚を輸出したという記録は明治初頭以来見られないが，第2次世界大戦の戦前および戦中に旧満州国や中国等へ現地自活，農業経営上の重要な基礎家畜としての豚の改良増殖あるいは一部試験研究用としての種豚が輸（移）出されている。その概況を（株）野沢組の記録によってみると輸（移）出総頭数は768頭で，詳細は表13.1のようである。

このうち，華北産業科学研究所（所長田口教一氏），公主嶺農事試験場等への輸（移）出は試験研究用であり，興農部新京（国立）種豚場への輸（移）出は旧満州国の基礎種豚の改良増殖，配布が目的であったが，国立種豚場（場長は故永田厚平氏）は事業開始直後に敗戦となり，業務中止に終わったと聞き及んでいる。

戦後わが国の種豚が外国へ輸出されるようになったのは昭和23年（1948年）以後であり，その輸出先は東南アジアに限られ，また輸出品種も当初は主としてバークシャー種であったため，輸出県は主要生産地であった埼玉，静岡，鹿児島，宮崎の4県であった。

そこで，この4県の畜産課長および関係団体の担当者を委員として昭和27年（1952年）6月に「バークシャー種豚輸出振興協議会」がつくられ，輸出豚の割当，検査，他県との連絡を密にして，種豚輸出の振興が図られた。協議会の事務局は日本種豚登録協会内に置かれていた。

その後，昭和31年（1956年）にいたって，アメリカの海外援助資金による南ベトナムへの種豚の大量輸出が行われるようになり，その品種はバークシャー種とヨークシャー種がほぼ半数ずつであったため，上記の4県に茨城，千葉，神奈川，愛知の4県を加えた協議会とし，昭和31年（1956年）7月「日本豚輸出振興会」と改称した。この協議会が取り扱った輸出頭数は総計11,416頭で，詳細は表13.2のとおりである。

なお，輸出種豚の護送のため（社）日本種豚登録協会，輸出県等の関係者がフィリピン，南ベトナム等へその都度出張した。

表13.1 種豚の輸(移)出概況

年次	品種	頭数		輸(移)出先	産地	購買者	(単位:頭)
		雄	雌				
1935 (昭10)	パークシャー	10	35	鉄路総局	静岡県浜名郡, 立川養豚場	永松	熊一守
"	"	7	20	"	立川養豚場	初鹿	浅兼
38 ("13)			15	浜江省美業部	"	宮永	頼美
"	パークシャー	3	12	錦州省公署	静岡県浜名郡畜産組合	末進	大迫修
40 ("15)	"	37	15	熱河省	" 浜名郡, 磐田郡	木下	嘉成
"	中ヨークシャー	2	8	安東省	千葉県	黒木	成田安彦
"	パークシャー	2	8	華北産業科学研究所中央農事試験場	静岡県	花尾省治,	成田安彦
"	パークシャー	3	12	三江省	静岡県浜名郡畜産組合	田中	博
"	パークシャー	15	30	熱河省		大迫	修次
"	パークシャー	30	14	滿天省		吉落	光竜
"	パークシャー	14	48	奉天省		荒井	隆
41	中ヨークシャー	4	20	浜江省勸農模範場	神奈川県, 高座郡畜産組合	神谷	陸
	パークシャー	4	20	"	静岡県磐田郡		
42	パークシャー	3	4	公主嶺農事試験場	立川養豚場		
	パークシャー	1	2	"			
"	パークシャー	41	15	蒙古連合自治政府興蒙委員会	畜産試験場		
43	"	88	60	滿鉄	埼玉県		
"	パークシャー		110	興農部新京種豚場	"		
44	パークシャー		220	山西省	千葉県, 静岡県, 埼玉県		
					静岡県浜名郡		
					山本新太郎, 佐藤二夫		
					広瀬政彦		
					永田厚平		
					鈴木		

表 13.2 種豚の輸出状況

(単位：頭)

年次	品種	頭数	輸出先
1948 (昭23)	バークシャー	70	沖 縄
49	〃	13	南 洋
50	〃	465	台 湾
〃	〃	85	沖 縄
51	〃	500	韓 国
52	〃	13	沖 縄
〃	〃	300	韓 国
〃	〃	296	フィリピン
53	〃	23	沖 縄
〃	〃	34	韓 国
〃	〃	600	フィリピン
54	〃	118	沖 縄
〃	〃	1	香 港
〃	ヨークシャー	8	〃
55 (〃30)	バークシャー	14	ビ ル マ
〃	〃	352	フィリピン
〃	〃	8	香 港
〃	ヨークシャー	8	〃
56 (〃31)	バークシャー	1,665	南ベトナム
〃	ヨークシャー	1,652	〃
57	バークシャー	226	〃
〃	ヨークシャー	297	〃
〃	バークシャー	7	香 港
〃	ヨークシャー	37	〃
〃	バークシャー	3	タ イ
〃	〃	6	沖 縄
58	〃	986	南ベトナム
〃	ヨークシャー	1,000	〃
59	バークシャー	1,000	〃
〃	ヨークシャー	1,000	〃
〃	バークシャー	8	台 湾
〃	ヨークシャー	300	〃
60 (〃35)	バークシャー	222	フィリピン
〃	〃	10	カンボジア
〃	ヨークシャー	10	〃
63	バークシャー	77	フィリピン

〔備考〕『日本種豚登録協会要覧』（1963年10月）。